

昭和52年度県営圃場整備地域
埋蔵文化財調査報告 2

上野市 比自岐 馬場西遺跡



図1 馬場西遺跡位置図 (1:25000)

1978・3

三重県教育委員会

I 前 言

馬場西遺跡は比自岐神社の西南約500mに位置し、行政的には上野市比自岐字馬場西に属する。現況は水田と畠の古墳時代を中心とする遺物包藏地である。

昭和52年度県営圃場整備事業上野南部地区の対象地となつたため昭和52年7月、事業計画地内の分布調査が県文化財調査員、寺岡光三氏によって実施された。

その結果、当遺跡の存在が確認され、この取扱いについて県農林部および上野耕地事務所と協議したところ、遺跡の範囲、構造の有無確認を目的とした、4m×2mのグリッド10ヶ所を設ける試掘調査を行なうことになり、10月31日に実施された。

これにより、削平予定地のうち、東方のグリッド(No.1・2)では顕著な遺構・遺物が検出され、馬場西遺跡の中心部と推定される地域が限定された。そこで、遺跡の中心部と推定される2筆の畠を対象に本調査を実施することになった。

本調査は昭和52年12月5日から翌年1月14日まで行なった。この間、遺跡の範囲をさらに明らかにするために、東方と北方に計6ヶ所の補足調査区(A~F)を設定した。調査に際しては、地元土地改良区、上野耕地事務所、工事請負会社等の協力を得た。記して謝したい。



図2 発掘区平面図 (1:2000)
網目 本調査区 黒塗 試掘坑 丸印 円墳
A~F 换算調査区 破線 古墳時代の集落想定可能範囲

II 位 置

馬場西遺跡は上野盆地の一部を構成する比自岐の小盆地に位置する。この比自岐盆地内は、盆地北辺の比自岐川と南辺の領主谷川とが西流し、合って杵川の谷を過ぎ、木津川(旧長田川)に合流する。当遺跡は、比自岐盆地の南辺丘陵が北に張り出した、その裾部の北面に立地する。

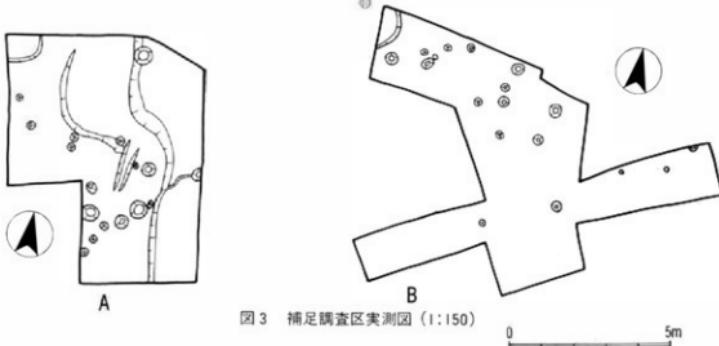
比自岐盆地の黎明期は縄文時代とすべきであろうか。王塚(22)南方の水田中(6)から石器が1点表面採集されている。

弥生時代も、馬場西遺跡をはじめ、北方に3ヶ所(3~5)と摺見の北方で若干の遺物が出土している。比自岐盆地の周辺には、後期の集落跡として著名な才良遺跡も存在する。^①

古墳時代には、石山古墳(21)等の前方後円墳が帆立貝式を含めて6基(19~24)、100基以上の円墳と共に存在する。^② 前方後円墳の分布は偏在し、北辺丘陵に4基存在するが、東辺丘陵と水田中には各1基しか存在せず、南辺丘陵には全く見られない。前方後円墳を仮に1系か多系かを問わず、累代1基築造とすれば、比自岐盆地に一定の完結性を想定可能だが^③、むろんこれは単純計算にすぎず、今後の研究を期すよりない。

飛鳥時代以降も上寺遺跡(16)等が存在する。仁和寺文書(872年)によれば、貞觀寺の比自岐莊が伊賀、阿伴、山田の3郡に存在したが、その名称から、伊賀におけるこの莊園の中核は比自岐にあったと考えられる。また、天喜4(1056年)の藤原実遠の所領目録からも窺えるように、条里が施行されていた。比自岐盆地はN16°Wの独自なブロックを形成している。^④ 清岸寺西方の水田中には「一之井」という古地名も残っており、条里地域への灌漑がここから行なわれたと推定される。式内社である比自岐神社は南面し、条里とは不整合に鎮座する点も興味深い。^⑤ さらに、神鳳鈔によれば、鎌倉時代初期前後に神宮の比自岐御厨が存在したとされ、多様な勢力の支配が実現されていた事が窺われる。

中世以降は、ほぼ集落ごとに寺院が見られ、丘陵部に墓地が形成されている。清岸寺には鎌倉末葉に比定される特徴的な形式の石仏等も遺存し、豊かな歴史的環境を物語っている。^⑥



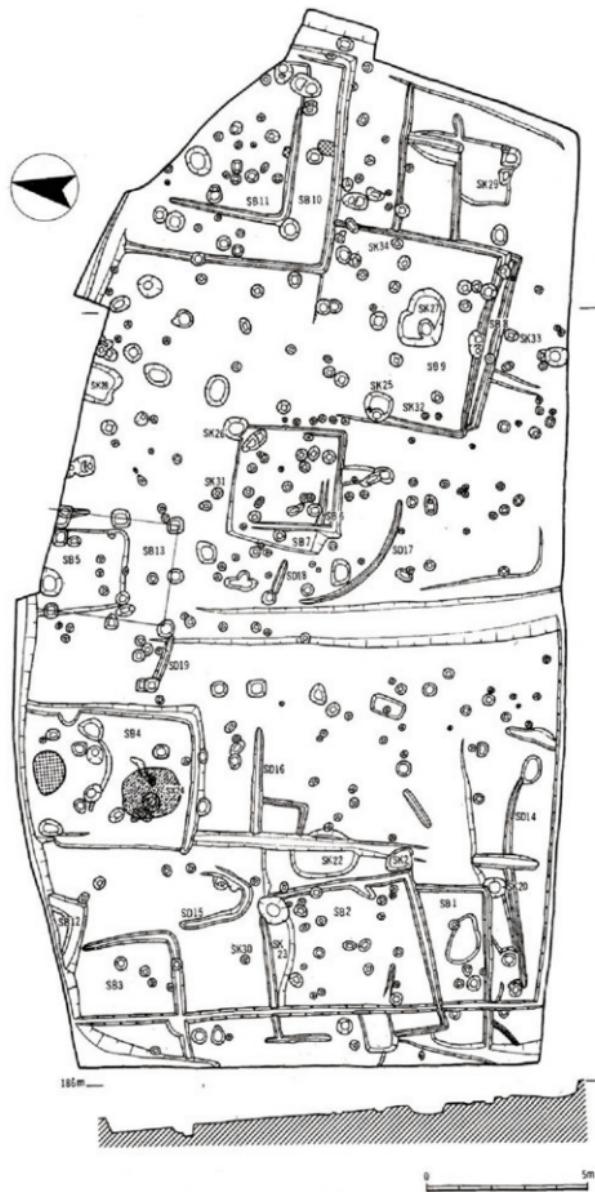


図4 調査区主要部実測図(1:150) 納目は焼土

III 遺構と遺物

古墳時代の竪穴住居を中心に、各時代の多様な遺構、遺物が検出された。以下、遺構を中心にこれに伴う遺物を記し、最後に包含層出土の主要な遺物について略記する。

なお、調査区主要部(図4)の中央の南北溝と、SK21・22を切る南北溝、調査区東縁や北縁西半部の落ち込みは全て畠境の溝である。また、SB1～3を切る南北溝やこれに続く調査区南縁の東西溝は調査に伴う排水溝である。補足調査はA・B区以外では遺構が遺存しなかった。

遺構は建物をSB、溝をSD、土塙をSK、墳墓をSXの略号で示した。また、遺物はロクロ^①ケズリはロクロの回転方向を、ヘラケズリは施手の回転方向を示した。

1 弥生時代

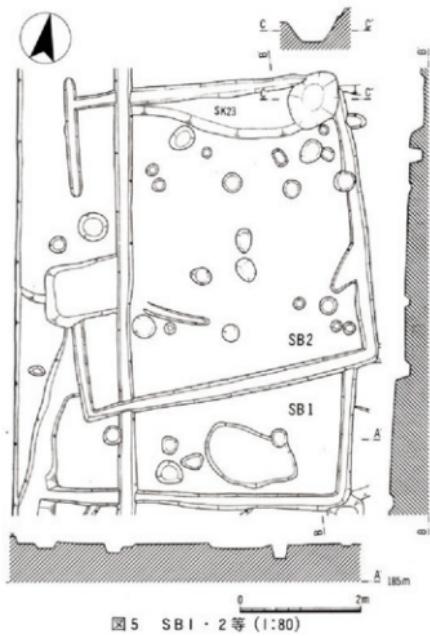
弥生土器1点(64)とサヌカイト片2点(66～7)、チャート片1点(65)が出土したのみで、遺構は確認されなかった。土器は壺の底部近くかと思われるが詳らかでない。石片は全て人為的な剥離痕を止めるフレイクである。チャートも有り、弥生時代の所産とするには若干の疑問も残るが、繩文土器の出土していない現状では一応弥生時代の遺物としておく。

2 古墳時代

調査区主要部では当遺跡の主要な遺構である竪穴住居をはじめ、土塙や溝等が検出された。調査区主要部は遺跡の中心部に当ると考えられるが、補足調査区や試掘坑には顕著な遺構はない。竪穴住居は全て方形プランを呈し、5世紀後葉から6世紀中葉に営なされたものである。

表I 竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模 ^② (東西×南北)	周溝	貯蔵穴	カマド等	重複関係	時期	備考
SB1	方形	(5.2)×2.3以上	東・南は確認	—	—	SB2より古	5C末～6C初	
SB2	"	4.6×4.9 5.0×5.3	4道	東北溝	—	SB1より新	6C前半	西中央部は入口か手標土器
SB3	"	4.0以上×2.8以上	東・南は確認	—	—	—	6C前葉	削平顯著
SB4	"	4.4×(4.1)	西は無	—	北壁	—	7C後葉	南中央部は入口か
SB5	"	2.6×2.6以上 2.3	無	(西北隅)	—	—	5C～6C初 あるいは7C前半	柱穴も同溝も無
SB6	"	3.3×3.3	北は無	(東北隅)	—	SB7より新	6C前葉	小規模
SB7	"	2.4以上×3.0	西・北は無 南は有	—	—	SB6より古	5C末～6C初	"
SB8	"	(5.6)×5.8	北は無	—	—	SB9より古 SB10より新	6C前半	SB9に改築(縮小)前
SB9	"	5.9×5.4	"	—	—	SB8より新 SB10より新	6C中葉	筋跡車
SB10	"	6.8×6.6	東・西・南は確認	—	焼土 (南壁)	SB8・9より古 SB11より古	6C前葉	最大規模
SB11	"	5.6×3.6以上	西・南は確認	—	"	SB10より新	6C前半	
SB12	"	2.5以上×1.6以上	幅約50cm	—	—	—	5C後葉～6C前葉	周溝内に土器器多数 手標土器



SB2 調査区西南部に位置する、最も遺存状態の良好な竪穴住居である。SB1より新しく北部は中世のSK23によって削平されていたが、周溝は4辺で確認された。平面形は略方形を呈するが、西壁は東壁よりやや長く、台形気味である。西辺の周溝は中央で切れており、入口と推定される。また西北隅の周溝は北に30cm程張り出しており、排水を考慮したものであろう。床面では多数の小穴が検出されたが、壁から1.4m前後離れた4小穴が柱穴であろう。東北隅には径約80cm、深さ約50cmを測る貯蔵穴が検出された。

貯蔵穴の底部からは高杯蓋の完形品(214)のほか、杯蓋片(210)や土師器の甕(201)等が出土した。また、北周溝底からも土師器の塊(203)や甕(205)が出土し、南周溝中央部底からは(212)が、東北隅の径約40cmの小穴からは(202)が出土した。さらにまた、埋土中からは短脚1段透高杯の小片も出土したが、確定な伴出遺物は総体的に陶邑のT K10に近似する。

なお、この地区の包含層からは紡錘車(60)が出土しているが、SB2に伴なう可能性もある。

SB3 調査区の西北隅に位置する。全容を知り得ないが、東と南側の周溝および東南と西南の柱穴が確認された。南壁の長さは、柱穴と周溝の距離から5m足らずと推定される。

床面いっぱいまで耕作によって破壊されており、良好な伴出遺物は得られなかった。出土土器は全て埋土中から出土した小片であり、確定な伴出遺物とは言い難いが、あえて比定すれば陶邑のM T15に近似し、6世紀前葉と考えたい。

(1) 竪穴住居と出土遺物

SB1 調査区西南隅に位置し北半部はSB2に破壊されているが、東と南の周溝によって確認された。西南隅は溝状の落ち込みによって破壊されているが、これより西側には周溝は認められず、確認できた南辺長は本米の規模に近いものであろう。東南と西南の柱穴は認められたが他の柱穴や貯蔵穴、カマド等は不明である。床面で浅い土塚が認められたが、地山の單なる汚れの可能性もある。

(101)は確定な伴出遺物だが(102)は浅い土塚の埋土中から出土した。これらは陶邑のT K23からT K47に近似し、5世紀末から6世紀初頭の所産であろう。

S B 5 調査区中央北部に位置し、北壁は畠境の溝によって破壊されている。当遺跡の中で唯一周溝が無く、また、柱穴も不明であり、焼土や炭化物もなく疑問点の多い竪穴である。規模も今回の調査で確認された中で最も小さい。床面で検出された北部中央よりやや西寄りの土塙は貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物は全て埋土中の小片であり、確かな伴出遺物はない。(503)は7世紀前半の杯であり、他は5世紀から6世紀初頭のものである。一応、(503)は埋没過程での混入と考えて古墳時代の竪穴としておくが、7世紀前半の可能性もある。

S B 6 調査区中央に位置し、小型の竪穴住居である。S B 7より新しく、周溝は北以外で遺存した。東北隅の一部2段掘りの土塙は深さ27cmを測り、貯蔵穴の可能性もある。床面では多数の柱穴が検出され、壁から1m弱の位置にある4穴が柱穴と推定される。しかしS B 6に伴なうかは不確実である。

出土遺物は、全て埋土中であり確かな伴出遺物はない。陶邑のM T 15とT K 47に近似する2型式の須恵器が混在しており、S B 7より新しいS B 6にはM T 15近似の遺物が伴なうものであろうか。

S B 7 調査区中央のS B 6に破壊されている。周溝は南側だけ検出されたが、少なくとも西と北側は元来存在しなかったものであろう。柱穴は不確実だが、西南以外の3柱穴に比定可能な小穴が存在する。

伴出遺物はないが、S B 6 埋土中出土品の内、古い部分(T K 47近似)がS B 7に伴なうものと推定される。

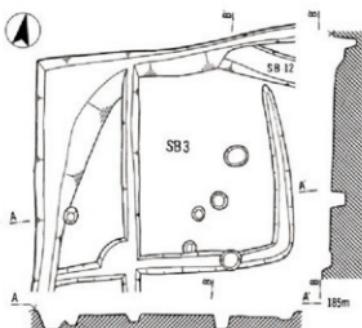


図6 S B 3 (1:80) 0 2m

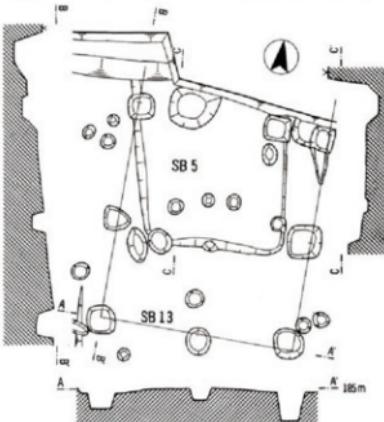


図7 S B 5・13等 (1:80) 0 2m

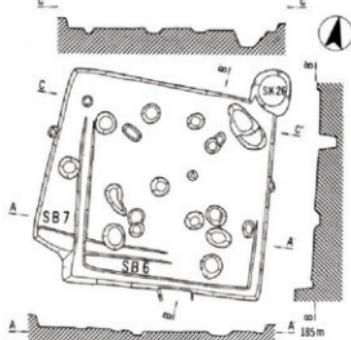


図8 S B 6~7等 (1:80) 0 2m

表2 SB I ~ 3, 5 ~ 6 出土土器一覧表

No.	出土遺構 (位 置)	器 形 (質)	大きさ ^{cm}	成形・調整技法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
101	SB 1 (南面溝の内側)	杯 蓋 (須恵)	口径 12.6 器高 4.8	ロクロナデ・ケズリ共順彌	砂粒少	良	灰褐色	小片
102	(土 塵 内) #	#	口径 13.6	ロクロナデ輪彌	白色小石	#	#	#
201	SB 2 (貯 藏 六 盆) (土師)	#	口径 19.2	外面ハケメ(5本/cm) ロ縁部ヨコナデ逆彌	白色小石 金雲母少	やや脆弱	茶褐色	盃み有 口縁部全残
202	(ビ ッ ト 内) (黒色)	碗	口径(11.6) 器高(4.0)	ロ縁部ヨコナデ	細砂粒少	良	内外共黑色	口縁部少残
203	(北 間 溝 底) #	#	口径 10.9 器高 6.0	ロ縁部ヨコナデ逆彌 放射状にヘアのアトリ	精良	#	外 茶褐色 内 黑色	若干欠損
204	(埋 土 中) ニチヤ (土師)	#	口径(4.6) 器高(3.4)	手捏	白色小石多	脆弱	褐色	盃み有 口縁部少残
205	(北 間 溝 底) 小型甕	#	口径 10.3	体部外面ハケ(3本/cm)	金雲母等砂粒	良	暗茶褐色	ロ縁部少残
206	(床面から若干逆彌) (須恵)	杯	口径 13.5 器高 5.2	ロクロナデ輪彌 ロクロケズリ逆彌?	白色小石 (~8%)	#	灰褐色	外面厚く灰かぶり 少残
207	(埋 土 中) #	#	口径 13.9 器高 4.3	ロクロナデ・ケズリ共順彌	白色小石多	#	#	外面薄く灰かぶり 口縁部少残
208	(#)	高 杯 #	底径 8.6	透し何孔か不明	細砂粒	#	#	脚部のみ少残
209	(#)	#	底径 10.9	外面カキメ	砂粒少	やや軟	#	長方形透は射孔か 不明 小片
210	(貯藏穴とピット内) 杯 蓋 #	#	口径 16.9 器高 4.8	ロクロナデ・ケズリ共順彌	白・灰・黑色 砂粒少	良	#	口縁部少残
211	(床面から若干逆彌) (#)	#	口径(13.6) 器高(4.2)	#	黑色粒等	#	#	外面厚く灰かぶり 小片
212	(南 間 溝 底) #	#	口径 15.0 器高 4.4	ロクロナデ・ケズリ共順彌 ヘラオコシ	砂粒	#	#	少残
213	(埋 土 中) #	#	口径 16.0 器高 4.5	ロクロナデ・ケズリ共順彌 内面乱ナデ	黑色粒少 白・灰色小石多	#	#	口縁部少残
214	(貯 藏 六 内) 高杯蓋 #	#	口径 14.9 器高 6.0	ロクロナデ・ケズリ共順彌	白色小石多	#	#	若干欠損
301	(埋 土 中) SB 3	杯 蓋 #	口径(15.9)	ロクロナデ順彌	白色細砂少	#	暗灰色	小片
302	(#)	#	—	#	白色小石	#	#	#
303	(#)	高 杯 #	—	#	砂粒少	#	灰褐色	#
304	(床面から若干逆彌) (土師)	#	—	—	精良	やや脆弱	黃褐色	器表風化
501	(埋 土 中) SB 5	小型甕 #	—	内面ヨコナデ	#	#	茶褐色	#
502	(#)	杯 蓋 (須恵)	—	ロクロナデ輪彌 ロクロケズリ逆彌	砂粒	良	灰色	小片
503	(#)	杯	—	ロクロナデ順彌? ヘラオコシ痕	#	#	灰白色	#
601	(埋 土 上 部) #	#	口径 12.8 器高 5.1	ロクロナデ・ケズリ共順彌 内面乱ナデ	#	#	淡黄灰色	外面厚く灰かぶり 半分残
602	(埋 土 中) #	#	口径 12.6 器高 4.7	ロクロナデ・ケズリ共順彌	#	#	灰褐色	少残
603	(埋 土 上 部) #	#	口径(8.9)	ロクロケズリ順彌	白色砂粒少	#	#	口縁部少残
604	(埋 土 中) #	#	—	ロクロナデ順彌	砂粒含	#	#	小片
605	(埋 土 上 部) #	#	—	ロクロナデ・ケズリ共順彌	細砂粒多	#	#	盃み有 小片
606	(#)	#	口径(15.3)	#	#	#	#	小片
607	(埋 土 中) 高 杯 #	#	—	ロクロナデ順彌 正しく3方に長方形透	砂粒含	#	#	#
608	(#)	#	—	ロクロナデ順彌	黑色微蛇	#	白灰色	長方形透は射孔か 不明 小片
609	(#)	碗 (土師)	口径 11.1 器高 4.3	ロ縁ヨコナデ順彌	金雲母微片含	#	淡橙黄色	少残
610	(#)	(黒色) (土師)	口径(11.1) 器高(5.4)	ロ縁部ヨコナデ 体部外面下部ハケ(6本/cm)	白色砂粒多	#	内外共黑色	小片
611	(#)	性格不明品 (土師)	長径 4.0	中空	白色小石多	脆弱	黃褐色	一部欠損

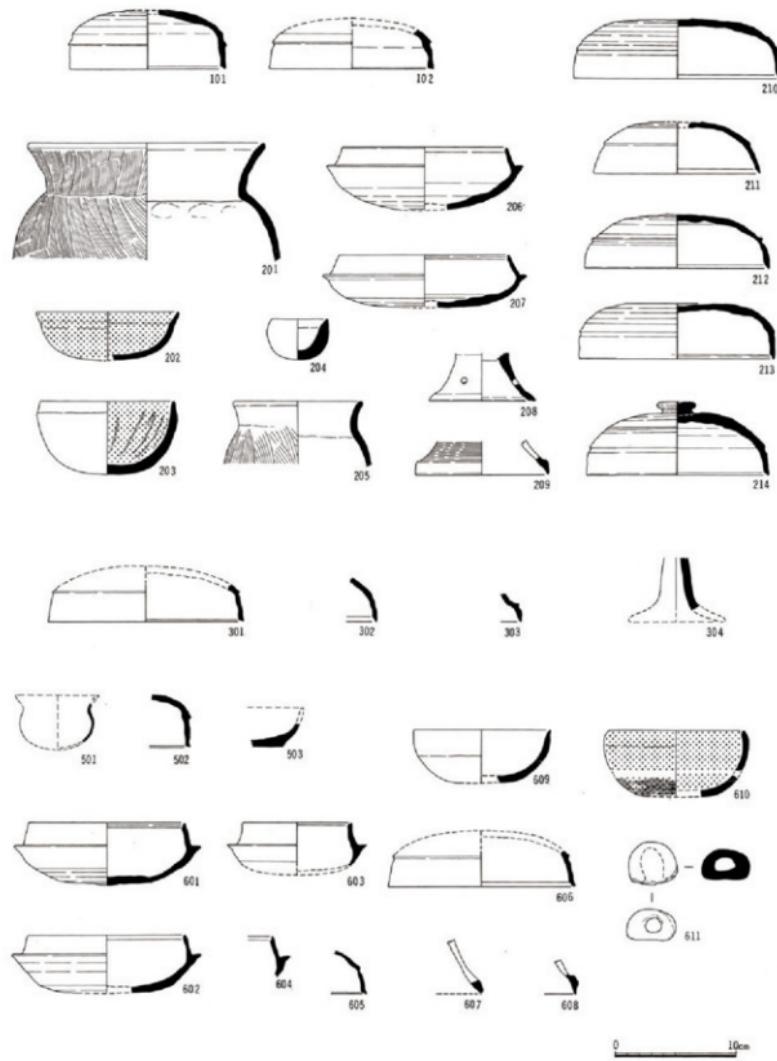


図9 SB 1~3、5~6 出土土器実測図(1:4)

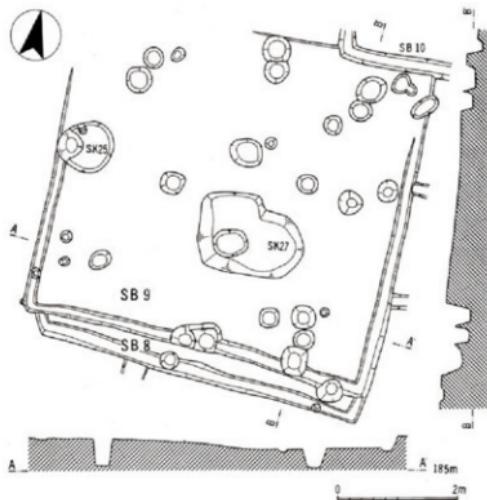


図10 SB8～9等(1:80)

S B 8 調査区東南部に位置し床面は S B 9 の床面より 10cm 程高い。S B 9 と大きく重複しているため、南周溝以外は不明確である。S B 10 の西南隅の西にわずかに遺存した段は、その位置と方向から北壁と推定される。床面では多数の小穴が検出されたが、S B 9 の柱穴とは別に、S B 8 の柱穴と確實に比定できるものはない。

(802)は確実に S B 8 に伴う。これは(203)に類似しており、6世紀前半の所産であろう。このほかに、床面から(1109)に類似する破片も出土した。

S B 9 調査区東南部の S B 8 と大きく重複している。S B 9 や S B 8 は S B 10 よりも新しい。一方、S B 9 の埋土上面から掘り込まれている S K25 や S K27、S K32 は後世のものであろう。S B 9 の北部も削平が著しく、北周溝等は遺存しなかった。東周溝の大部分は S B 8 の周溝と重複しているが、S B 9 の周溝の方が若干深い。床面も S B 8 の床面より 10cm 程深い。床面では多数の小穴が検出されたが、S B 9 の柱穴は壁から 1m 前後離れて存在する 4 小穴と推定される。カマドや炉と推定できる焼土や炭化物は検出されなかった。

明らかな伴出遺物は、東周溝の北部で並んで出土した土器壺(907～8)のみである。しかし、(904～6)も床面から若干遊離しているのみであり、S B 9 に伴なう可能性は大いにある。(904)は極めて大きな高杯の蓋である。埋土中出土の紡錘車(910)は斜面が内寄する截頭円錐形を呈す。伴出遺物は総体的に 6 世紀中葉の所産であろう。

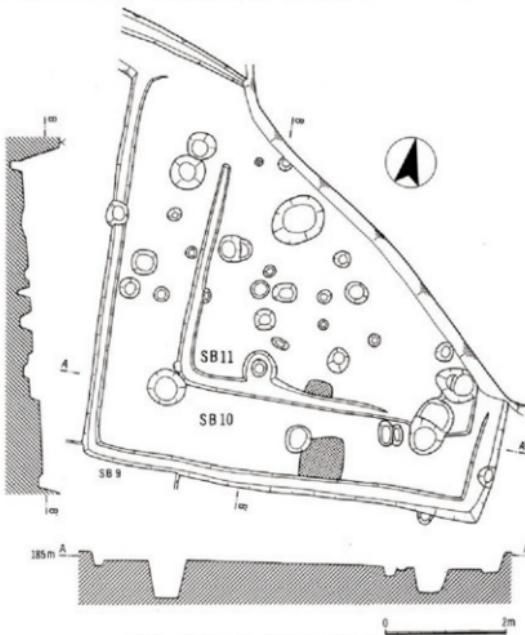
S B 8 と S B 9 は南側以外が極めて良く重複しており、建て替えもしくは部分的改築を想定すべきであろう。このいずれであったかは柱穴が推定の手掛かりとなろう。すなわち、S B 8 の柱穴は不明確であるのに対し、S B 9 では正方形に配された 4 主柱が推定できる。特に西南隅で柱穴に比定可能な小穴は明らかに 1 穴のみである。この事実から屋根組軸部におよぶ建て替えではなく、部分的改築と考えられよう。とすれば、南側の平面規模の拡大か縮小かが問題となるが、S B 8 は S B 9 より古いという事実から縮小したものと理解される。要するに、その南壁や南周溝を造り替え、垂木を短縮させながら 6 世紀前半から中葉にかけて存続した 1 棟の堅穴住居のふたつの姿は、S B 8 から S B 9 への部分的改築の結果と理解される。

S B 10 調査区東北部に位置する、最も大規模な竪穴住居である。S B 9 や完全に重複する S B 11よりも古い。北壁は完全に流失しており北周溝も不明であるが、西北隅では周溝内側の肩がわずかに遺存しており、西周溝の長さが判明した。周溝は4周に巡らされていた可能性が高い。S B 10の床面はS B 11の床面より10cm以上高く、S B 11が明らかになるまではベッド状遺構の可能性も考慮させる状態であった。柱穴は東北を除く3ヶ所で確認されたが平面規模と同様に他の竪穴住居の柱穴よりも大きいものである。壁から1.2m前後の位置である。南周溝中央部に接する床面より約5cm高いレベルに焼土が認められた。ここでも周溝は途切れず、埋土中にはやや細長い自然石が2個倒立していた。焼土は薄く広がるのみであり、カマドとするには疑問点が多い。この西側に接する小穴は径20cm余、深さ10cm程の小さなものである。ここからは1個の自然石と共に杯蓋(1008)が出土したが、S B 10よりも新しい小穴であろう。

(1014~6)はS B 10に伴なうものであろう。(1001)が出土した小穴は床面で検出できたものであるが、他のS B 10伴出土器より新しい。また、(1017~8)は埋没過程での混入とすべきである。高杯の脚部は4点全てが短脚である一方、杯口縁端部は面を持つとはいえ丸味を帯びている。S B 10は6世紀前葉の所産とすべきであろう。

S B 11 調査区東北部のS B 10と完全に重複する。S B 10より10cm余深く、S B 10の床面で初めて検出できた。従って埋土中の遺物はどちらの竪穴住居に伴なうか不明なものも含む。北部は流失しているが、西と南には周溝が巡る。柱穴に比定が可能な小穴は東北以外の3ヶ所で認められた。南周溝中央部に接して焼土が小範囲に分布していたが、カマドとは考えられない。

(1101・5~7・9)はS B 11に伴なうものである。(1101)は腰が張って深いが、口縁端部は丸味が強い。(1105)は特異な形態であるが、蓋の一種と思われる。(1109)は類例がS B 8からも出土した。S B 11はS B 10よりも若干新しく、6世紀前半の所産であろう。



図II S B 10~11 (1:80) 網目は焼土

表3 S B 8 - II出土土器一覧表

No.	出土 遺 標 (位 置)	器 形 (質)	大きさ ^{cm}	成 形・調 整 技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
801	(埋 土 中) S B 8	杯 盆 (須恵)	—	ロクロナデ須選	白色小石	良	灰色	小片
802	(南 周 溝 底) (土師)	壺	口径 11.3 器高 6.8	ロクロナデ須選	白色細粒	#	茶色	ほぼ完形
901	(理 土 中) S B 9	杯 盆 (須恵)	—	ロクロナデ須選	砂粒	#	灰色	小片
902	() ()	〃	—	ロクロナデ須選	細砂粒	#	#	#
903	() ()	〃	—	ロクロナデ須選	砂粒	#	#	#
904	(東 周 溝 突) 高杯 盆	高杯 盆 (須恵)	口径 17.5 器高 6.8	ロクロナデ・カキメ共須選 内面乱ナデ	小石	#	#	少残
905	(床面から若干退屈) ()	杯	口径 15.2	ロクロナデ・ケズリ共須選	白色粒多	#	#	小片
906	(東 周 溝 内) 高 杯	高 杯 (土師)	口径 10.0	ロクロナデ・ケズリ共須選 ヘラ描斜線列	細砂粒少	#	#	杯部のみ半分残
907	(東 周 溝 底) (土師)	壺	口径 7.5 器高 10.9	体部外面ハケメ(3本/%) 体部内面に縫目	白色小石多	#	暗茶褐色	完形
908	() ()	〃	口径 10.8 器高 12.6	体部内外に縫目	白色砂粒 金雲母微片	#	黄褐色	#
909	(床面から若干退屈) (須恵)	盤 盆	直径 12.0	ロクロナデ・ケズリ共須選	砂粒少	#	灰色	底部少残
910	() (滑石)	勝鍊車 (滑石)	外径 3.8 重量 30 g	斜面を板にケズリ 上から穿孔	良質	—	暗灰緑色	#
1001	(南 周 溝 底) S B 10	杯 盆 (須恵)	口径 15.5 器高 4.8	ロクロナデ・ケズリ共須選	小石少	良	灰色	少残
1002	(埋 土 中) ()	〃	口径 12.6	ロクロナデ須選	小石多	#	#	小片
1003	() ()	〃	口径 13.0	ロクロナデ須選	砂粒	#	#	#
1004	() ()	〃	口径 14.2 器高(4.6)	ロクロケズリ須選	精良	#	黑灰色	少残
1005	() ()	杯	口径 12.4 器高(4.4)	ロクロナデ・ケズリ共須選 底部内面乱ナデ	黑色等砂粒	やや軟	灰色	#
1006	() ()	〃	口径(15.8)	ロクロ方向不明	小石	良	#	小片
1007	() ()	杯 盆	口径 15.1	ロクロナデ・ケズリ共須選	砂粒多	#	墨灰色	#
1008	(南中央部ピット内) ()	〃	—	ロクロナデ・ケズリ共須選	小石多	#	灰色	内面薄い灰かぶり
1009	(埋 土 中) ()	〃	—	ロクロナデ須選	小石少	#	#	#
1010	() ()	〃	—	ロクロナデ須選	砂粒少	#	#	#
1011	() ()	〃	—	—	砂粒	#	#	#
1012	() ()	高 杯 ()	底径(9.8)	内面シボリ	精良	#	黑灰色	透孔不明 小片
1013	() ()	〃	底径 8.5	カキメ	#	#	灰色	円形透は何孔か不明 小片
1014	(東 南 部 床 面) ()	〃	底径 9.6	ロクロナデ須選、菱形透4 孔、底部内面乱ナデ	#	#	#	脚部少残
1015	(埋 土 中) ()	〃	—	内面シボリ 長方形3方透穿孔後カキメ	砂粒少	#	暗灰色	脚部のみ残
1016	(南 週 徳 土 中) (土師)	壺	口径 15.9	内外に縫目	小石 金雲母	やや脆弱	黑褐色	器表風化 小片
1017	(埋 土 中) (須恵)	杯 盆	口径(15.8)	内面乱ナデ	細砂少	良	灰色	外面重複底 小片
1018	() ()	壺 (黒色)	口径 14.6	ヘラミガキ幅 1%弱 窓い端文(ジグザグ文)	砂粒 金雲母	#	黑色	半分残 高台欠
1101	(南 周 溝 内側肩) S B 11	杯 盆 (須恵)	口径(13.2) 器高(4.9)	ロクロナデ須選 ロクロケズリ須選	砂粒	#	灰色	小片
1102	(埋 土 中) ()	〃	口径 12.0	ロクロナデ・ケズリ共須選	#	#	#	外面薄い灰かぶり #

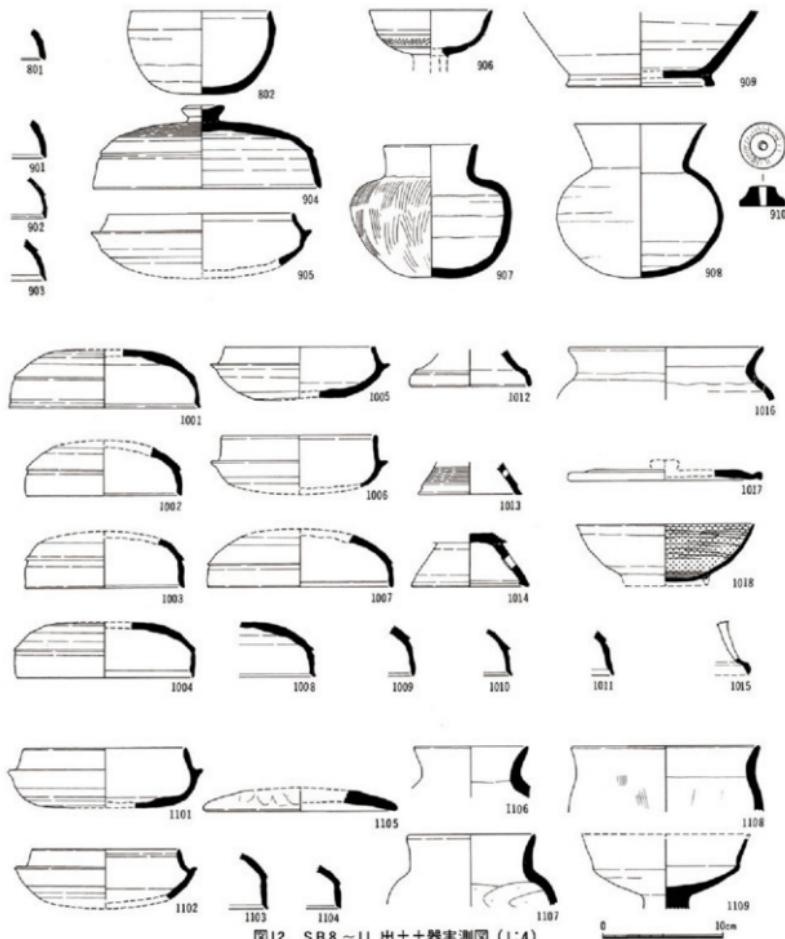


図12 SB8-11 出土土器実測図 (1:4)

1103	S B11 (埋 土 中)	杯 蓋 (須恵)	—	ロクロナデ逆邊	砂粒	良	黒灰色	小片
1104	(〃 〃)	(〃 〃)	—	ロクロナデ順邊	小石	〃	灰色	〃
1105	(〃 〃)	蓋? (土師)	口径 15.5	外面捺印調整 内面一方向ナデ	金雲母等砂粒	〃	淡茶色	焼残
1106	(床面 から若干 差離)	小型 盞?	口径(9.3)	口縁部ヨコナデ逆邊? 体部内面ヘラケズリ?	小石多	やや脆弱	暗褐色	器表風化 小石
1107	(〃 〃)	(〃 〃)	口径(10.4)	口縁部ヨコナデ順邊 体部内面ヘラケズリ	〃	〃	橙黄色	〃
1108	(埋 土 中) (床面 から若干 差離)	盤?	口径 15.3	口縁部ヨコナデ順邊 体部外面部の上をタテナデ	小石少	良	黒褐色	小片
1109	(床面 から若干 差離)	高 杯 (〃)	—	—	白色小石多	脆弱	橙褐色	器表風化 口縁端・脚部共欠損

S B12 調査区西北部に位置し、畠境の溝や水田造成時の削平によって大部分は破壊されている。遺構は、幅約50cmのL字形を呈する溝と、これに開まれる10cm程低い部分が検出された。周溝としては一般的なものよりやや幅が広いが、一応竪穴住居と判断した。

周溝内からは多数の土師器(1201~8)が出土した。これらは全て一括資料であり、須恵器を含まない。(1206)は体部外面をヘラケズリし、その上をナデてあり、全面にススが付着している。(1207~8)は同巧異大である。これらの所属時期は、当地方における須恵器出現前後の編年が不充分であるため確実でないが、一応5世紀後葉から6世紀前葉の所産と考えたい。

(2) 溝と出土遺物

S D19 調査区中央部北寄りに位置する溝であり、幅20cm余、深さ5cm足らず、現存長約1.5mを測る。手捏土器(3)が出土した。これは(204)や(1203)に類似する。

(3) 土塙と出土遺物

S K20 調査区西南部のS B 1の周溝東南隅によって破壊されている土塙であり、径約65cm、深さ約20cmを測る。底部から出土した(8)は、古式土師器の比較的新しいものであろう。

S K21 S B 2の東南に接する土塙であり、80cm×60cm、深さ約20cmを測る。埋土は、他の古墳時代の遺構と同様に黄褐色粘質土であり、土師器の細片が出土したのみである。

S K26 S B 6の東北隅を破壊している土塙であり、70cm×60cm、深さ約25cmを測る。土師器の壺(7)の破片が出土した。6世紀代のものであろう。

S K29 調査区東南部に位置する土塙であり、深さ10cm足らずの不定形なものである。出土土器(6)は6世紀前半に属する。

S K33 S B 8に南接する小穴である。埋土中から、6世紀前半の須恵器(22)が出土した。

S K34 S B 9と重複する小穴である。カキメを持つ長脚2段透無蓋高杯(23)と土師器の壺(24)が出土した。(24)は(203、610、802)と同器種である。

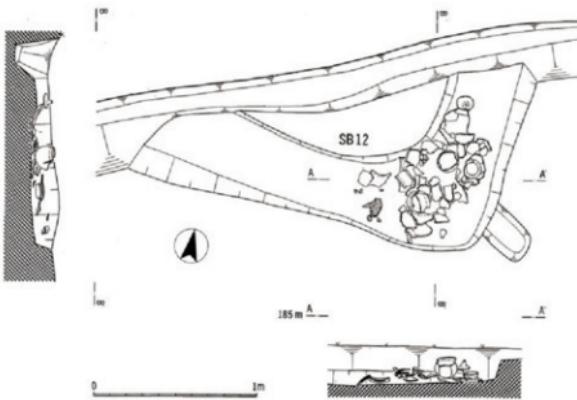


図13 SB12 遺物出土状況 (1:30) 罫目は炭化物

(4) その他

調査区全域で土塙や溝、多くの小穴が検出された。しかし、良好な遺物も伴なわず、性格不明である。これらの埋土は、明らかな古墳時代の遺構と同様に、黄褐色粘質土系のものが多く、同時代と推定される。

3 飛鳥時代以降

(1) 穫穴住居と出土遺物

S B 4 調査区北部に位置し、北側が削平された竪穴住居である。周溝は東と南には巡るが西には存在しない。東北隅の周溝は北方に延びていた。おそらく、S B 2 と同様に排水を考慮したものであろう。西壁は畠境の溝によって大きく破壊されているが、西北隅はかろうじて検出された。推定される北壁の中央部の若干東寄りに焼土が認められた。カマドにふさわしい位置であるが、遺存状況は良好でない。主柱穴はやや南北に長い長方形を呈する位置に4穴認められた。北側の2柱穴に各々接する小穴は補助的な柱穴であろうか。南壁の2ヶ所の小穴はS B 4 に関係するものと考えられ、主柱穴の南延長上にある事から小屋組軸部に関連する可能性も否定できないが、南北棟で北側にカマドが、南側に入口がそれぞれ付設された竪穴住居を想定し、南壁上の2穴は入口に関する柱穴と考えたい。

(401~5・7~10・13)はS B 4 の伴出遺物である。杯蓋はかえりを持つ例(410)と持たない例(407~9)とがある。小型の杯は底部内面に乱ナデを施す点は共通するが、口径や口縁部の立ち上り具合等は相異する。(406・11・14~16)は埋没過程での混入であろう。(411)は5世紀後葉の器であり、(414)は奈良時代のものである。S B 4 の時期は、杯蓋等から7世紀後葉とすべきであろう。

(2) 挖立柱建物と出土遺物

S B 13 調査区北中央部のS B 5(図8)と重複する。当遺跡で確認された唯一の掘立柱建物である。北部は削平されており、南北規模は不明だが、3間以上×2間の南北棟である。柱痕跡は不明だが、棟方向はほとんど磁北に一致する。桁行は柱間が1.8m等間、梁間は約1.6m等間と推定される。S B 13の柱掘方はS B 5の埋土を掘ったものであり、S B 13はS B が完全に埋没した後に建てられたものであろう。S B 13の柱掘方からは、古墳時代須恵器の図示できない程の細片が出土している。しかし、S B 5の埋土中には7世紀前半の杯(503)が含まれており、S B 13は7

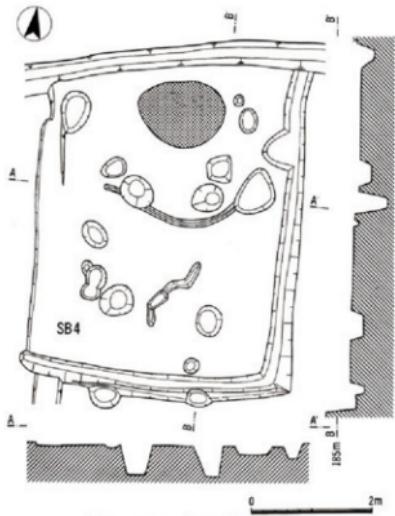


図14 S B 4 (1:80) 網目は焼土



図15 S X 24 (1:20) 破線内は焼土、I点破線内は炭化物

表4 S B12・4, S D16・18~19, S K27・29・26出土土器一覧表

No.	出土遺構 (位位置)	器形 (質)	大きさ ^{cm}	成形・調整技法	胎土	焼成	色調	備考
1201	(周溝内) S B12	甕 (土師)	口径 19.2	体部内面ヘラケズリ?	砂粒多	やや脆弱	淡黄褐色	体部外面にスス口縁部完形
1202	(")	"	口径 14.3	体部外面ハケメ(8本/cm) 体部内面不調整	小石多	脆弱	茶褐色	"
1203	(")	ミニチャ 器高(4.6)	口径 4.2	手捏 黑斑	砂粒不	良	暗灰色	底部欠損
1204	(")	小型甕 (")	口径 11.0	口縁部ヨコナデ	砂粒少	"	淡黄褐色	外面に薄くスス 欠損
1205	(")	高杯 (")	底径 8.4	脚内面ヘラケズリ逆題	"	"	黄褐色	脚部のみほぼ完形
1206	(")	壺 (")	口径 12.8	体部外面ヘラケズリの上を ナナフ頭部にヘラのアトリ	金雲母等砂粒	"	"	外面にスス ほぼ完形
1207	(")	甕 (")	口径 14.0	口縁部ヨコナデ 体部内面に継目	小石多 金雲母微片	"	暗赤茶色	体部外側にスス 口縁部は完形
1208	(")	"	口径 13.8	口縁部ヨコナデ 器高 21.5	砂粒多	"	黄褐色	体部外面にスス ほぼ完形
401	(西北ピット内) S B 4	杯蓋 (須恵)	口径 14.2	ロクロナデ・ケズリ共順題	小石	軟	灰白色	内面風化 少残
402	(床面から若干逆離) (")	"	口径 16.4 器高(2.4)	ロクロナデ・ケズリ共順題 内面亂ナデ	細砂少	良	灰色	少残
403	(東周溝内) (")	杯 (")	口径 15.0 器高 3.9	ロクロナデ順・ケズリ逆題 底部内面乱ナデ	"	"	"	口縁部少残
404	(埋土下部) (")	"	口径 12.9 器高 3.5	ロクロナデ順題、ヘラオコ シ、底部内面亂ナデ	黑色粒	"	灰白色	半分残
405	(床面から若干逆離) (")	杯蓋 (")	口径 11.2 器高 3.7	ロクロナデ順題 ロクロケズリ逆離	灰色石	軟	"	口縁部少残
406	(床面) (")	"	口径 10.0 器高 3.1	ロクロナデ順題 ヘラオコシ	細砂少	良	灰色	口縁部少残
407	(")	"	—	ロクロケズリ逆離 内面乱ナデ	"	"	"	並み有 小片
408	(埋土下部) (")	"	—	ロクロケズリ順題	砂粒	やや軟	黒灰色	小片
409	(東周溝内) (")	"	—	"	細砂粒	"	灰白色	"
410	(埋土下部) (")	"	—	ロクロナデ・ケズリ共順題	細砂粒少	良	灰色	"
411	(")	甕 (")	口径 12.5	ロクロナデ順題	砂粒	"	"	口縁部のみ少残
412	(埋土中) (土師)	甕 (")	口径(15.4)	口縁部ヨコナデ	雲母等砂粒	"	黄褐色	小片
413	(埋土下部) (")	"	口径(18.0)	—	白色小石多	"	暗褐色	器表風化 小片
414	(埋土上部) (")	杯 (")	口径 15.9 器高 2.7	—	細砂粒	やや脆弱	桃褐色	少残
415	(")	壺 (瓦器)	口径 15.2 器高 4.5	内面ヘラミガキ (幅1%強)密	稍良 灰白色	良	黑色	楷文は連弧文? 少残
416	(埋土下部) (土師)	高杯 (土師)	底径 10.7	組み合せ成形技法 内面ヘラケズリ順題	金雲母等砂粒	"	黄褐色	脚部のみ残
1	S D16 (埋土中)	杯 (須恵)	口径 11.0 器高 3.7	ロクロナデ順題 ヘラオコシ	黑色粒多	軟	灰褐色	並み有 少残
2	S D18 (瓦器)	壺 (瓦器)	口径 14.3 器高 4.7	暗文幅約1%	細砂少	良	胎土は 黃白色	風化著しく暗文等 不明 少残
3	S D19 (")	ミニチャ (土師)	口径 4.5 器高 4.3	手捏	白色小石多 金雲母	"	茶褐色	完形
4	S K27 (")	杯蓋 (須恵)	—	ロクロナデ順題	小石少	"	灰色	小片
5	(")	甕? (土師)	—	—	小石多	脆弱	黄土色	志摩式製造土器 口縁部と底部欠損
6	S K29 (")	杯蓋 (須恵)	口径(16.8) 器高(4.7)	ロクロナデ・ケズリ共順題	"	良	灰色	小片
7	S K26 (")	甕 (土師)	口径(9.0) 器高(12.0)	内外に継目	白色小石少	"	橙褐色	器表風化 口縁部と底部欠損

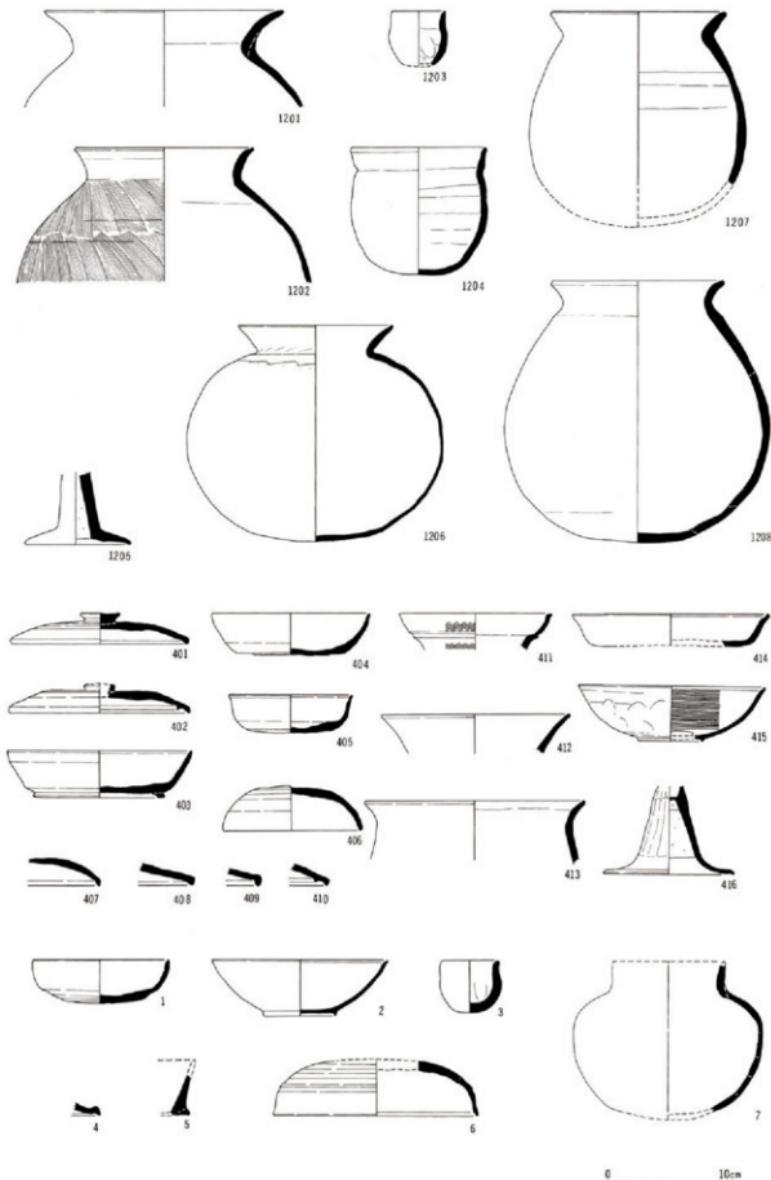


図16 SB12-4、SD16-18-19、SK29-26 出土土器実測図 (1:4)

表5 S K20・22-23・30-34・補足調査区A出土土器一覧表

No.	出土 (位 置)	造 構 (質)	器 形 (質)	大きさ cm	成形・調整技法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
8	(S K20 底)	高 杯 (土師)	口径 15.0	—	白色小石多 金雲母	良	茶褐色	器表風化 脚部欠損	
9	(埋 土 中)	皿 (土)	口径 8.0 器高 1.8	口縁部ヨコナデ 底部指圧調整	白色小石 金雲母	"	橙褐色	孟み有 口縁部劣化	
10	(" ")	壺 (瓦器)	底径 5.7	暗文幅 1%強 高台の作りは丁寧	精良	"	胎土は 黄白色	昭文は連輪状文 か 底部小片	
11	(" ")	(山茶壺)	底径 6.3	内面厚く灰かぶり	"	"	灰色	重健底 孟み有 底部空洞 口縁部欠損	
12	(" ")	釘 (鉄)	全長 7.0	頭部は折り曲げ	—	—	—	鉄化 完形	
13	(S K23 " ")	壺 (瓦器)	—	内面ヘラミガキ幅 1%弱 外面ヘラミガキ不明	精良	良	胎土は 黄白色	イブシからず 小片	
14	(" ")	皿 (土)	口径 7.8 器高 1.3	暗文幅広(約 1.5%) 口縁部に沈線なし	"	"	"	孟み少し有 小片	
15	(" ")	壺 (骨壙)	高台径 6.4	輪は厚く不透明な灰緑色 突出高台 口クロケズリは清晰	白茶色微粒	"	胎土は白色	高台まで輪は流下 底部のみ完形	
16	(" ")	杯 蓋 (須恵)	口径(15.6)	ロクロナデ順透	砂粒	"	灰色	小片	
17	(" ")	甌 (土師)	口径 18.4	ハケメ(4本/cm)	白色小石多 金雲母	"	茶褐色	口縁部劣化	
18	(S K30 " ")	皿 (瓦器)	口径 8.9 器高 1.5	乱ナデの上に暗文(幅約 1%)	精良	"	灰色	孟み有 ほぼ完形	
19	(S K31 " ")	性格不明品 (土師)	外径 2.8	体部に挿入したものか	白色等小石多	"	赤褐色	中空 把手状部のみ残	
20	(" ")	杯 (須恵)	口径 16.0 器高 4.4	ロクロナデ順透	小石多	"	灰色	高台劣化	
21	(S K32 " ")	壺 (瓦器)	口径 15.7 器高 5.5	暗文(幅約 1%)は連続輪状 文か	精良	"	胎土は 灰白色	内面ヘラミガキは 密 口縁部少残	
22	(S K33 " ")	杯 (須恵)	口径 14.3 器高 4.5	ロクロナデ・ケズリ共順透	小石少	"	灰色	劣化	
23	(S K34 " ")	高 杯 (土 土)	底径 8.8	ロクロナデ逆透 カキメ 3方透	"	"	"	脚下半部のみ完形	
24	(" ")	壺 (土師)	口径 11.6	—	小石多	脆弱	茶褐色	器表風化 小片	
25	補足調査区A (暗褐色砂質土)	高 杯 (土 土)	口径(16.0) 器高 13.7	円盤充填組み合わせ成形技 法	金雲母等砂粒多	良	淡灰茶色	孟み有 脚部部分 底部劣化	
26	(" ")	杯 蓋 (須恵)	口径(11.6) 器高(4.5)	ロクロナデ・ケズリ共順透	小石多	"	灰色	小片	
27	(" ")	杯 (土 土)	—	—	小石	"	"	"	
28	(溝 + 埋 土 中)	高 杯 (土 土)	底径 8.3	ロクロナデ逆透 カキメ	砂粒少	"	"	円形透は3孔か 脚部のみ劣化	
29	(暗褐色砂質土)	甌 (土師)	口径 18.5	ハケメ(3本/cm)は浅い 口縁部ヨコナデ	金雲母等砂粒多	"	淡茶色	口縁部のみ半分残	
30	(" ")	壺 (黒色)	口径 17.0 器高 3.9	外面へラケズリ 内面ヘラミガキ	雲母等細砂粒	"	暗茶色	内墨の黑色土器 口縁部は少残	
31	(床 土)	杯 (須恵)	底径(11.4)	ロクロナデ逆透 底部内面亂ナデ	精良	"	白灰色	孟み有 小片	
32	(暗褐色砂質土)	皿 (土 土)	口径 13.2 器高 3.3	ロクロナデ順透 ヘラオコシ	小石	"	"	小片	
33	(" ")	蓋 (土 土)	口径 16.2	ロクロケズリ順透 内面亂ナデ	砂粒少	"	灰色	口縁部に剥離痕 上面灰かぶり劣化	
34	(床 土)	杯 蓋 (土 土)	口径 13.6	ロクロナデ・ケズリ共順透 内面亂ナデ	小石多	"	"	小片	
35	(暗褐色砂質土)	皿 (土 土)	口径(13.8)	—	砂粒少	"	"	外面に薄い灰かぶり 小片	
36	(" ")	皿 (土 土)	口径 15.8	ロクロナデ順透	小石	"	"	"	
37	(" ")	皿 (土 土)	—	"	白色小石等	"	"	"	
38	(" ")	皿 (土 土)	—	ロクロナデ・ケズリ共順透	細砂	"	"	"	
39	(" ")	皿 (土 土)	口径 19.3 器高 1.8	ロクロナデ順透 内面亂ナデ	精良	やや歛	"	"	

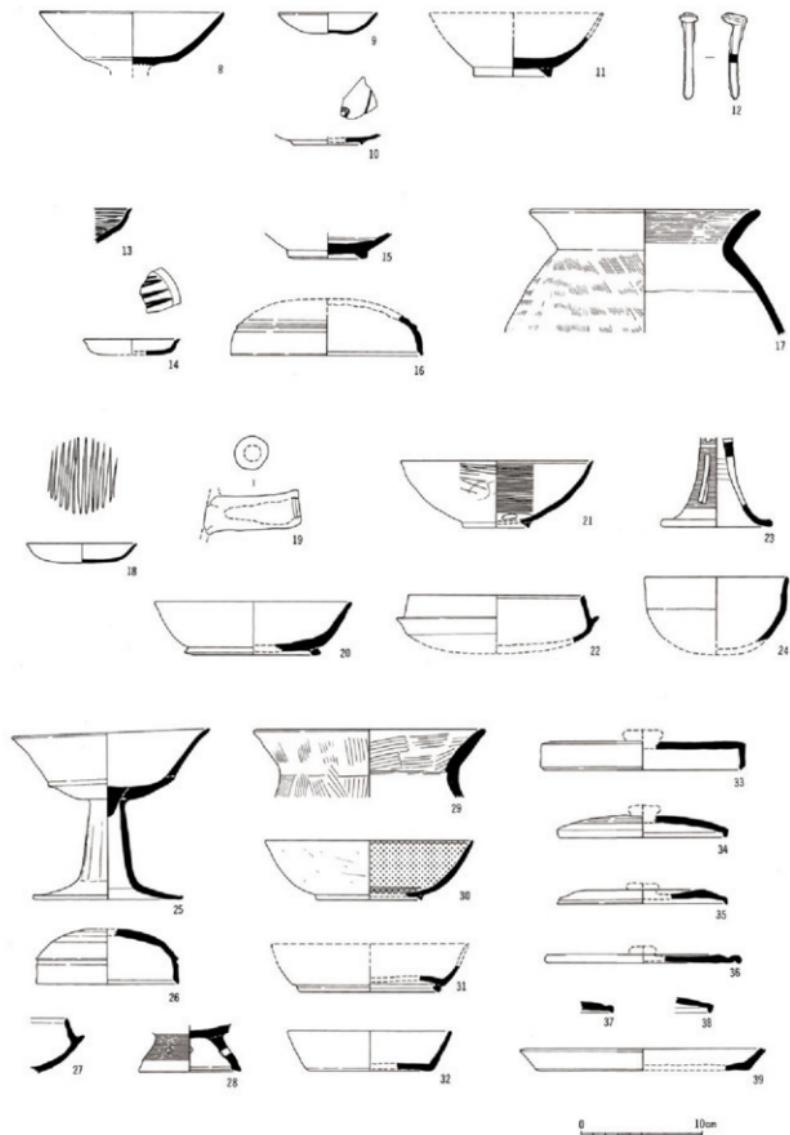


図17 SK 20・22-23・30-34・探査区A出土土器実測図 (1:4)

表6 棚足調査区F・調査区主要部 包含層出土土器一覧表

No.	出土遺構 (位位置)	器形 (質)	大きさ ^{cm}	成形・調整技法	胎 土	焼成	色 調	備 考
40	F区 (床 土)	塊 (綠釉)	底径 5.6	胎は薄く淡緑色 平底か	細砂	軟	胎土は 白灰色	磨滅著 小片
41	D区 ()	■ (青磁)	底径(5.4)	胎は灰褐色	精良	良	■	小片
42	F区 ()	— (古窯口?)	—	胎は茶色でナデラが見られる	細砂	■	胎土は灰色	■
43	D区 ()	杯 (須恵)	口径 13.0 器高(4.5)	ロクロナデ・ケズリ共順彫	小石	■	灰色	外側に薄く灰かぶ り 口縁部半残
44	調査区主要部 ()	皿 (綠釉)	口径(12.8) 器高 2.1	胎は全面に薄く淡緑色	良	■	胎土は灰色	3片を図上復元
45	■ ()	杯 (須恵)	口径 12.1 器高 5.1	ロクロナデ・ケズリ共順彫	小石多	■	灰色	赤み有 外側に薄く灰かぶ り 口縁部欠損
46	■ ()	高杯 (土師)	底径 9.2	脚柱状部外側タテナデ 内面へラケズリ 2孔	金雲母微片	■	橙褐色	脚柱状部のみ残
47	■ ()	皿 ()	口径 10.5 器高 1.6	底部に粗目板 口縁部ヨコナデ	白色小石多	鶴窓	外 黒 内 色 表面黒褐色 はぼ完形	正み有 口縁部のみ残
48	■ ()	壺 (須恵)	口径(13.0)	ロクロナデ逆彫	小石	良	灰色	正み有 口縁部のみ残
49	■ ()	杯 ()	口径 11.3 器高 3.5	ロクロナデ順彫 ヘラオシ	■	■	■	口縁部は残
50	■ ()	杯 壺 ()	—	ロクロナデ・ケズリ共順彫 内面品ナデ	白色小石	■	■	口縁部少々残
51	■ ()	■ ()	—	ロクロ方向不明 内面品ナデ	小石	■	■	口縁部欠損
52	■ ()	■ ()	口径 16.3	ロクロ方向不明	細砂	やや軟	■	口縁部欠損
53	■ (耕 土)	小型壺 (瓦器)	口径 9.2 器高 2.4	胎は連続輪状文か ヘラミガキ帽は 1%強	精良	良	胎土は 灰白色	小片
54	(床 土) ()	■ ()	口径(9.0) 器高 1.5	胎文帽は 1%弱 口縁部ヨコナデ	■	■	■	イブシは薄 はぼ完形
55	■ ()	■ ()	口径(9.5) 器高 1.5	胎文帽は 1%強 口縁部ヨコナデ	砂粒少	■	■	赤み有 全面にイブシ はぼ完形
56	■ ()	壺 ()	口径(14.9) 器高 4.4	胎文(桁 1%弱)は継約した 連続輪状文	■	■	■	■
57	■ ()	■ ()	口径 15.2 器高(4.1)	胎文(桁 1.5%)は連続輪状 文か	■	■	黄白色	全面にイブシ はぼ
58	■ ()	■ ()	口径(15.0) 器高 4.5	胎文(桁約 1%)は連続輪状 文か	精良	■	■	半分残
59	■ ()	羽釜 (土師)	口径 26.6	ツバの下はヘラケズリ	砂粒多	■	茶褐色	内面に炭化物付着 有残
60	■ ()	蕎麥車 (石)	外径 4.1 重量 23 g	上面は研磨、下面は擦痕 側面はケズリ	良質	—	暗灰緑色	完形
61	■ ()	体 (土師)	—	粗製	砂粒多	脆弱	淡黄褐色	いわゆる志摩式解 巻表面化 小片
62	■ ()	■ ()	—	■	■	■	橙褐色	■
63	■ ()	■ ()	—	■	■	■	茶褐色	■

世紀前半以降の所産と考えられる。

(3) 溝と出土遺物

S D 16 S B 4 の南に位置する東西溝であり、幅約30cm、深さ約10cm、現存長約3.2mを測る。小型の杯(1)が出土した。7世紀前半の所産であろう。

S D 18 調査区中央のS B 7 の西に位置する溝であり、幅約20cm、深さ数cm、現存長1.1mを測る。瓦器塊(2)が出土したが器表の風化が著しい。平安時代末の所産であろう。

(4) 土塙と出土遺物

S K 22 調査区西部のS B 2 の東に位置する浅い土塙である。土師器の小皿(9)や瓦器塊片(10)と共に伊賀では珍しい山茶塙(11)や、頭部を折り曲げた断面長方形の鉄釘(12)等が出土した。平

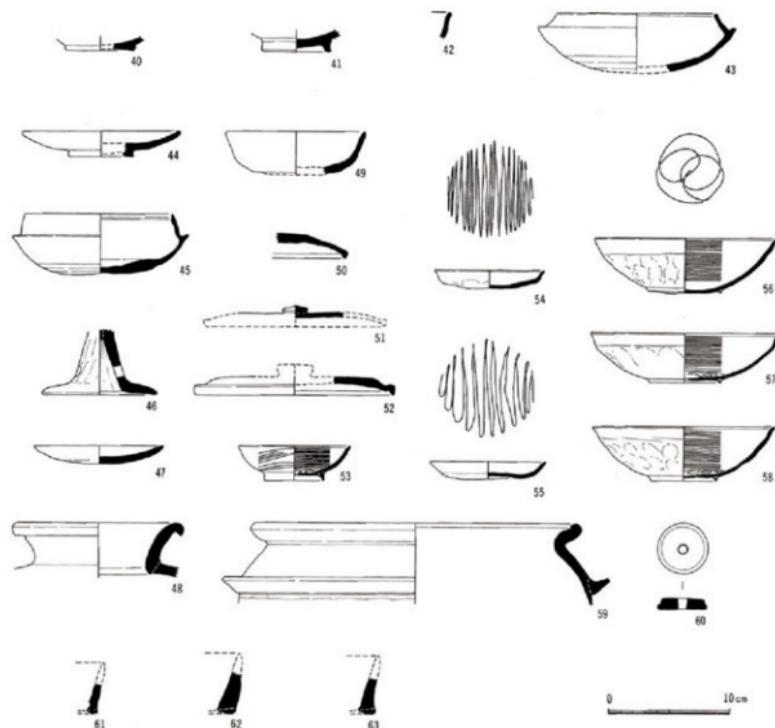


図18 捜索調査区F・調査区主要部包含層出土土器実測図(1:4)

安時代末の所産であろう。

S K23 調査区西部のS B 2を破壊している土塙である。削平が著しく、現状ではS K22・23は別個の土塙見えるが、元来は一体の不定形な土塙であった可能性が高い。古墳時代の須恵器(16)も含むが、平安時代末のものを中心とする。(15)は青磁碗であり、不透明な灰緑色の釉が厚く施されている。輸入品であろう。

S K25 S B 9の埋土上面で検出された径約40cm、深さ10cm余の土塙である。底部には焼土が認められた。土製の鋳型かと思われる細片(73~4)が炭化物と共に出土した。金属加工に関係する遺構の可能性もあるが、時代は6世紀中葉のS B 9より新しいと言い得るのみである。

S K27 試掘調査の際に確認された土塙であり、S B 8・9の埋土上面から掘り込まれている。1.8m×1.1m、深さ45cmを測り、西南部はピット状に一段低くなっている。埋土中から奈良時代と推定される杯蓋片(4)と共に、いわゆる志摩式製塙土器片(5)が出土している。しかし、両者

①

共1点ずつの小片であるため、志摩式製塙土器が奈良時代の所産であるとは即断できない。

S K30 調査区西部に位置する、径25cm程の小穴である。埋土から出土した瓦器皿(18)は、口縁端部に沈線を欠き、ジグザグ文の暗文を止めている。

S K31 調査区中央のS B 7より北に位置する、径約30cmの小穴である。杯(20)等が出土した。

S K32 S B 9の埋土を掘り込む、径約20cmの小穴である。出土した瓦器塊(21)は、断面三角形を呈する高台を持ち、連続輪状文の暗文を止める。12世紀の所産であろう。

(5) 墳 墓

S X24 調査区西北部のS B 4 埋土上面で検出された土塙であり、90cm×80cm、深さ10cm余を測る(図16)。土塙内壁は焼土化し、1体分の火葬骨が炭化物とともに検出された。人骨は遺存状態が悪く性別等は不明だが、北首西顔させた右側臥屈葬と推定される。釘は出土せず、掘方が円形である点から桶を利用したものであろう。顔面前方、すなわち、膝の上には6枚の銅鏡(76)が遺存した。火を受けたため、極めて脆弱になっており、鑄造年代はもとより、その種類も不明であり、直接時代を知り得ないが中世後期から近世初期に属しよう。

(6) 包含層出土遺物

補足調査区Aの包含層である暗褐色砂質土中からは、古墳時代と奈良時代を中心とする多様な土器(25~39)が出土した。(25)は杯部と脚部の接合技法等が観察できる好資料である。(25~28)は5世紀後半から6世紀前半に属しよう。奈良時代の須恵器(31~39)の内には薬壺の蓋(33)も含まれる。平安時代前期の黒色土器A(30)は、口縁端部に沈線を持ち、底部内面には暗文かとも考えられるヘラミガキがかすかに認められる。

補足調査区D・Fは顕著な遺構もなく出土遺物(40~43)も少ないが、その内容は多様である。(40)は縁釉壺である。軟質で細砂粒を含む白灰色の胎土に、淡緑色の釉が薄く施されている。(41)は青磁壺である。灰白色を呈する硬質で精良な胎土に黄灰色の釉が施されている。(42)は古瀬戸と思われる小片である。これと共に同様な釉調の香炉片(75)等も出土している。

調査区主要部の包含層からも多様な遺物(44~74)が出土した。(44)は縁釉の皿である。硬質で砂粒をほとんど含まない灰色の胎土の全面に淡緑色の釉が薄く施されている。蛇目高台と推定される。(48)は14世紀頃の壺である。藏骨器の可能性もある。(53)は瓦器小塊である。しっかりした高台を持ち、全体に丁寧な作りである。(54~5)は瓦器皿である。器形全体の相違のほかに、口縁端部の沈線の有無や同じジグザグ文の暗文でも微妙な相違がある。(55~8)は瓦器塊である。(58)は比較的しっかりした高台を持つに対し、(56)は底を支えられない程低い高台であり、暗文も極めて簡略化された連続輪状文である。これらは12世紀代における型式差であろう。(59)は大和に類例が求められる羽釜である。平安時代末から鎌倉時代初めの所産であろう。(61~3)はいわゆる志摩式製塙土器である。破片は合計で70点程出土しているが、いずれも小片であり、図上復元はもとより、図示できるものも少ない。

また、(77)は南の畠で表面採集された鉄滓である。鑄型状土製品(73~4)と共に興味深い。

⑨

IV 結 語

今回の馬場西遺跡の発掘調査は、県営圃場整備事業に先立つものであったため、調査としては多くの制約があった。しかし、それなりに多くの事実が明らかになった。それは、さらに多くの問題点を提起したわけでもある。

1 遺物の特徴

ケズリ技法は、伊賀においても庄内式併行期以後しばしば見られる。馬場西遺跡出土品中にも類例が含まれる。(1107)や(1206)には、それぞれ内・外面に施されている。特に(1206)は外面をケズリ、その上をナデているらしい点が特徴的である。(1106)も内面ケズリの上をナデしている可能性が高い。東海地方では、比較的新しい小型丸底壺等を除いてケズリ技法は一般に見られない。これに対して、畿内等では一般的な技法であり、伊賀も基本的にはこの地域に包括されよう。しかし、伊賀周辺では、ケズリを施す部分が畿内とは異なったり、その上をナデする場合もある点が特色といえよう。

須恵器は奈良時代まで含めても当遺跡では100点に満たず、小片が多い。しかし、一応観察可能なものについてはロクロの回転方向等に注意した。その結果、5世紀末から6世紀前葉では多くがロクロを順廻りに回転させ、以後はさらに順廻りの比率が高まる。しかし、7~8世紀になっても逆廻りの例は少々残る。また、各時期を通じて、ケズリとナデではロクロの回転方向が異なる例が1割弱見られる。集落から出土する須恵器は複数の窯から供給された可能性が高く、その実態は単純ではなかろう。消費地での検討の場合、胎土や混入物、技法、形態等による分類も大切と思われるが、馬場西遺跡においては資料的制約も大きく、検討できなかった。しかし、陶邑と比較すると、概して杯蓋は口縁端面の変化に対して矮は後まで残る例が多い等の傾向を持つようである。また、胎土に石英や長石と思われる白色の小石を混入したものも見られた。

黒色土器(202~3、610)が6世紀前半から出現している点は注目される。(203)はほぼ完形の黒色土器Aであり、(202、610)はBであるらしいが小片であり不確実である。3点共ヘラミガキは不明であるが(203)の内面には放射状のヘラのアタリも見られる。器形は3点共塊であり、須恵器の杯身や蓋を模したものは考えられない。同様な器種で黒色化されない例(609、802、24)もある。当遺跡出土品中では、平安時代のA(1018、30)は有るがBは無い。伊賀においては一般的にBは稀なようである。大和等では8世紀後半にAが出現し、やがてBも見られるようになり、遂には瓦器生産技術が成立するというスムーズな展開を遂げる。一方近江では瓦器は一般化せず、Aが主体であり続け、Bはほとんど見られないという。これに対し、6世紀前半にすでに黒色土器が出現しており、奈良、平安時代においてBが少ないが後に瓦器分布圏に属する点は伊賀における特徴的な現象であろう。

製塙土器(5、61~3、68~72)の出土は山国である伊賀での初見である。これらは、いわゆる

志摩式製塙土器であるが、その後同じ上野市内の下郡遺跡でも確認された。奈良時代に属す可能性もあるが確定的ではなく、やはり平安時代の所産であろうか。この種の土器は確かに製塙と密接に関係するが、単に煎熬段階だけでなく精製段階までも含めて具体的な使用法が明らかにされなくてはならない。[◎]また、この分布範囲は志摩地方を中心に伊勢、そして伊賀を加えたわけだが、その存続期と共に生産と流通の実態を明らかにする事が今後の重要な課題であろう。[◎]

綠釉陶器(40、44)の出土も伊賀においては田中遺跡に次ぐ希少な例である。その後の下郡遺跡出土例は全般に濃緑色を呈するのに対して、当遺跡出土例は淡緑色を呈する。

瓦器も出土したが、量的には多くはない。「大和の瓦器は他地域のものに比べて器肉が薄く、断面による観察では淡灰白色で水漉した均一な粘土から成り、砂粒を全く含んでいないのも顕著な特徴の一つ」であり、口縁端部内面の沈線は「大和以外の地域では省略されているものが多くまた他地域では早く消失する傾向がみられる」という。[◎]しかし、伊賀の瓦器も器肉が薄く、口縁端部内面の沈線も少なくとも塊については大和と同様な傾向を持つようである。だが、大和ではしばしば見られる火拂が伊賀では未確認であり、胎土も相違する例もある。また、伊賀の瓦器は焼化の不充分な例は見られるが、その部位は体部や口縁部の1ヶ所であり、口縁部に一対という例は未確認である。成形、調整技法と共に焼成技法も合せて、地方色等を注意してゆきたい。

2 集落の形成

「位置」の項でも若干触れたように、比自岐盆地における弥生時代の実態は不明な点が多い。しかし、古墳時代に入ると、全長120mを測る石山古墳を始めとして多くの古墳が築造された。石山古墳は、その規模を周辺の古墳と比較するとひときわ大きく、単に比自岐の小盆地のみをその基盤として成立したものとは考え難い。しかしその後は、比自岐盆地内にも数十mの前方後円墳は築造され続けたらしい。数十mの前方後円墳は才良付近にも存在しており、各々が一定程度独立した社会単位を構成していた可能性はあろう。さらに、比自岐盆地内の古墳の分布に注目すると、前方後円墳が1基も知られていない南辺丘陵部に対して、4基の前方後円墳の存在する北辺丘陵部の優位性が窺われる。こうした現象に包蔵地の分布密度も対応しているようである。南辺に立地する馬場西遺跡も、5世紀中葉以前は遺構や遺物の希少な事実から生活圏に属してはいても居住地としては利用されていなかったと想定される。

集落の形成は6世紀前半を中心に、5世紀後葉からであろう。竪穴住居は北側が削平されている場合が多いが、全て方形プランを呈し、周溝が基本的に4辺を巡る。SB10やSB11の南壁寄りに焼土が分布していたが、古墳時代の竪穴住居でカマドの明確な例が無い事はひとつ疑問点であった。貯蔵穴も明確なものはSB2の東北隅に存在したものだけである。同様の傾向は、馬場西遺跡の西北西4km足らずに位置する下郡遺跡・法専寺地区のほぼ同時期の竪穴住居群にも窺える。これに対して北堀池遺跡では、従来約半数の竪穴住居の隅に設けられていた貯蔵穴が5世紀末のカマドの出現とその一般化と共に、貯蔵穴もほとんど全ての竪穴住居に設けられるようになる。このように、同じ伊賀地方でも遺跡間に相違が見られ、あるいはカマドの出現、普及の時

表7 古墳時代竪穴住居の規模

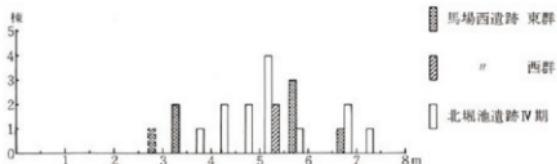


表8 古墳時代竪穴住居の群構成

	群	小グループ	SC	TC	備考
S B 1	西	a	---	---	手捏土器（紡錘車） 〃
〃 2		b	=====	---	
〃 12		c	=====	---	
〃 3		d	=====	---	
〃 5	東	e	=====	---	あるいは7C前半か 小規模 〃
〃 7		f	=====	---	
〃 6		g	=====	---	
〃 8		h	=====	---	改築 紡錘車
〃 9		i	=====	---	
〃 10		j	=====	---	
〃 11					

期は同一地方でも何らかの社会集団間に跛行性が存在したのかもしれない。貯蔵穴の実態にも同様な社会的要因があった可能性は高かろうが貯蔵穴等と共に、竪穴住居の規模も注目に値しよう。表7は、馬場西遺跡の古墳時代竪穴住居と北堀池遺跡のほぼ同時期(IV期)の竪穴住居の一辺長を比較したものである。表に見る通り、北堀池遺跡では4~5mを中心とした7m前後の例もあるが、馬場西遺跡では5m以上と3m前後とに2分される傾向がある。傾向の偏りは例数の少なさに起因するととも考えられようが一応注目すべき現象であろう。この現象を合理的に説明できる用意はないが、密接に関係するであろう集落の構成について以下に若干の考察を試みよう。

まず、各々の竪穴住居の存続期を問題とすべきであろう。占地を考慮して存続期を模式化したものが表8である。試掘調査や補足調査の結果と、地形や遺物の散布状況から古墳時代集落の広がりを推定すると、調査区主要部の東西と北には、もう少し広がるのみだが、南方には山際までの広がりが推定できる(図2)。したがって、調査は集落跡の主要部におよんでおり、この竪穴住居群は次のような理解が可能であろう。すなわち東西2群に大別され、さらに西群はa(S B 1・2)、b(S B 12・3)、東群はc(S B 5?・7・6)、d(S B 8・9)、e(S B 10・11)に細分される。この小グループを構成する個々の竪穴住居は同時存在ではなく、繼起的な小世帯であろうか。東西2群間には、南に広がる空地が存在したとも考えられる。東西2群の各々は、いわゆる世帯共同体に比定可能であろう。しかし、全体で1群とも考えられ、今回の調査だけでは即断できない。東西2群を仮定しても、両者間には特に格差を想定できるような遺物はないが、竪穴

住居の平面規模が西群の5m程に対して、東群は6m前後と3m前後とに両極分解している点は注目される。

一般論として、5世紀に農業生産力が飛躍的な向上を遂げ、後期の群集墳成立の前提となつたともいわれる。比自岐盆地は、古墳や包蔵地の分布状況から全体として北側の開発が先行し、南側は相対的に遅れたと考えられる。馬場西遺跡において5世紀後葉から竪穴住居が認められる現象は、分村の結果とも想定できよう。もし分村とすれば、親村は盆地北側に存在した可能性は大きいにあろう。南側丘陵上の円墳群の少なくともその大部分は後期群集墳と考えられる。馬場西遺跡に南接する丘陵上の古墳群も、当遺跡の集落形成と密接な関係が想定される。この古墳群は全て円墳で構成され、特に突出した規模のものは見られないが、あるいは馬場西遺跡では倉庫や特に有力な建物が認められなかつた事実に対応するものであろうか。馬場西遺跡は、少數もしくは単数の世帯共同体で構成され、剩余生産物の処分権を持ち得ず、再生産の単位は他集落との関係において想定されるべき集落であつただろう。

7世紀代にも細々と居住地として利用されていた事がS B 4等の竪穴住居によって知られる。ところが、天平20(748)年柘植郷における家屋は掘立柱建物である。[◎] 竪穴住居から掘立柱建物への変遷は、畿内中心部では奈良時代にはほぼ完了し、三重県地方でも大差ないものと推定されているが、伊賀地方における具体例を加えたわけである。

奈良時代から鎌倉時代にかけては、製塙土器や綠釉陶器をはじめとして各時代の遺物は出土しているが、1棟の掘立柱建物以外に顕著な遺構はなく、当時の遺跡の性格は不明な点が多い。

3 集落の廃絶以後

5世紀中葉以前の馬場西遺跡は、生活圏に属していてもまだ居住地ではなかつたと考えられる。5世紀後葉から6世紀中葉にかけては、住居が次々と造られ、当遺跡においてはおそらく最も人口の多い時期であったろう。しかし、この集落は小規模であり、近接集落との関係において從属的であった可能性が高かろう。やがて6世紀後葉以降、人影はまばらになるが、竪穴や掘立柱建物が細々と建てられ、平安時代頃には製塙土器や綠釉陶器という一般には入手が困難なものもあり、神宮等の莊園經營の事実と合せて当時の集落の性格には興味深いものがある。

中世になって間もなく集落は移動し、その後この地にはわずかな墓が営なまれただけの寂しい所であっただろう。墓は六文銭を副葬した北首西顔の臥屈葬であるが、火葬土塚をそのまま墓壇とし、しかも群在しないという珍しい例である。六文銭が判読不能であり、時代が明らかでないが、六文銭の副葬から中世後期から近世初期に属するものであろうか。付近には墓石は見られないが、藏骨器とも考えられる壺(48)や香炉片(75)も出土している。

やがて墓も忘れ去られ、田や畠として利用されるようになって現在に至り、圃場整備によって一見大きな変貌を遂げているようであるが、その区画には条里の遺制も読み取られ、歴史の生きている事が知られる。

(山田 猛)

<註>

- ① 宇佐晋一「三重県上野市才良遺跡概報」『古代学研究』12 1955
- ② 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」『日本考古学協会第八回総会研究発表要旨』 1951
- ③ この外に前方後円墳の可能性がある地点が盆地東方に1ヶ所知られている。
- ④ 同様な現象は、比土付丘を基盤とするらしい美旗古墳群についても指摘されている。
森浩一、森川桜男、石部正志、田中英夫、塙田啓一「三重県わき塙古墳の調査」『古代学研究』66 1973
- ⑤ 『平安道文』第165号文書
- ⑥ 『平安道文』第763号文書
- ⑦ 福永正三「伊賀国の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』 1979 福永正三氏の御教示によるところが大きい。
- ⑧ 「神鳳鈔」『群書類從』
- ⑨ 現存寺院以外に、御幣寺、阿弥陀寺(字長昌寺所在)、戒藏庵、不動寺、峯之堂、蓮生庵等の名が知られている。
- ⑩ 太田古朴「仏像と五十年」1 1979
- ⑪ 伊藤博幸「ヘラキリ」と「ヘラ起し」と「糸切り」『古代学研究』66 1973 等の論考があるが、ここでは「ヘラキリ」と「ヘラオコシ」をあえて区別せず「ヘラオコシ」とした。
- ⑫ 平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群Ⅰ」 1966
- ⑬ 近藤義郎「小海」磯部町教育委員会 1976 伊藤保氏等の御教示も得た。
- ⑭ 稲垣晋也「法隆寺出土資料による羽釜の編年」『大和文化研究』7-7 1962
- ⑮ 横井勇氏の御協力を得た。
- ⑯ 小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」『考古学研究』70・71 1971
- ⑰ 中森英夫、山田猛、山本雅靖「下郡遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会、上野市下郡遺跡調査会 1978
山田猛「下郡遺跡試掘調査概報」三重県教育委員会 1979
- ⑱ 小玉道明氏の御教示によれば、痕跡時に用いたものならば損耗が激しかったと考えられるが、「製塩遺跡」からの出土量は必ずしも量ではないという。
近藤義郎「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』87 1976
- ⑲ 近藤義郎、渡辺則文「製塩技術とその時代的特質」『日本の考古学 VI』 1967
- ⑳ 沖島昭之「三重県田中遺跡出土の瓦器と練土器片」『古代学研究』15・16 1956
- ㉑ 中森英夫、山田猛、山本雅靖「下郡遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会、上野市下郡遺跡調査会 1978
- ㉒ 輕池北遺跡調査会「軽池北遺跡発掘調査報告」 1977
- ㉓ 谷本観次、吉水康夫、駒田利治、山田猛「北堀池遺跡発掘調査概要II」三重県教育委員会 1979
- ㉔ 都出比呂志「農業共同体と首長権」『講座日本史 1』 1970
- ㉕ 都出比呂志「農具鐵器化の二つの画期」『考古学研究』51 1967
- ㉖ 八賀晋「古代における水田開発」『日本史研究』96 1968
- ㉗ 馬場西遺跡南丘陵上の円墳中、丘陵頂部に位置するやや大型の円墳が最近盗掘されたが、この際に円筒埴輪片や須恵器片が出土しており、当遺跡の集落形成期と時期的に一致する。
- ㉘ 『寧楽道文 下』小治田朝臣藤麻呂解
- ㉙ 横山浩一「村のくらし」『古代史発掘 10』 1974

参考文献

- 上野市「埋蔵文化財第一次調査報告書」 1978
 早瀬保太郎「伊賀史概説」 1973
 和田忠臣「伊賀国編年史料」 1978
 福永正三「秘藏の國」 1972
 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』54 1969
 安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60 1974
 和島誠一、金井塙良一「集落と共同体」『日本の考古学 V』 1966
 金井塙良一「関東地方の方形周溝墓」『考古学研究』72 1972
 佐々木達夫「古代村落の変遷過程」『原始古代社会研究 1』 1974
 高橋一夫「和泉、鬼高湖の諸問題」『原始古代社会研究 2』 1975
 鬼頭清明「八世紀の社会構成史的特質」『日本史研究』172 1976
 広瀬和雄「古墳時代の集落類型——西日本を中心として」『考古学研究』97 1978
 坂室論成「葬式仏教」 1977
 斎藤忠「墳墓」 1978

PL I



比自岐盆地航空写真



調査前遠景（E→W）



調査前遠景（N→S）



調査中風景



調査・圃場整備後遠景（N→S）

PL 2



調査区主要部全景 (W→E)



調査区主要部 (E→W)

PL 3



上 SB1-2 (N→S)

下左 SB2 貯藏穴



下右 SB2 遺物出土状况

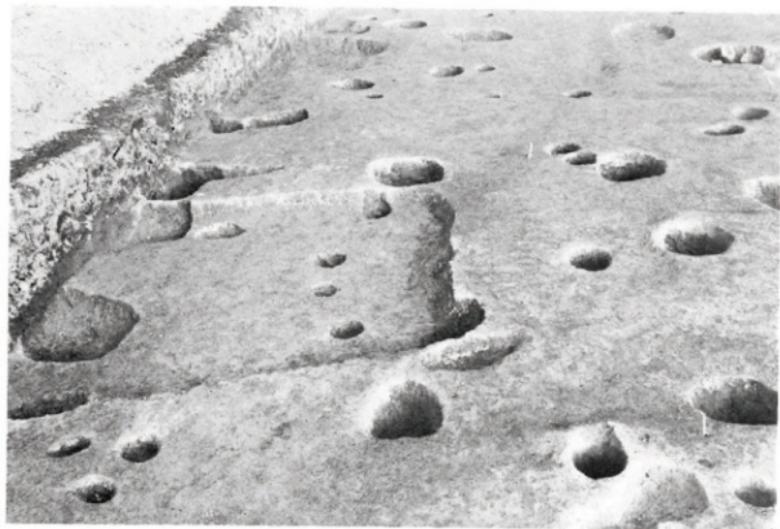


SB3 (W→E)

PL 4



SB4 (N→S)



SB5·I3 (W→E)

PL 5



SB6-7 (N→S)



SB8-9 (N→S)

PL 6



SB10-II (W→E)



SB12 (S→E)

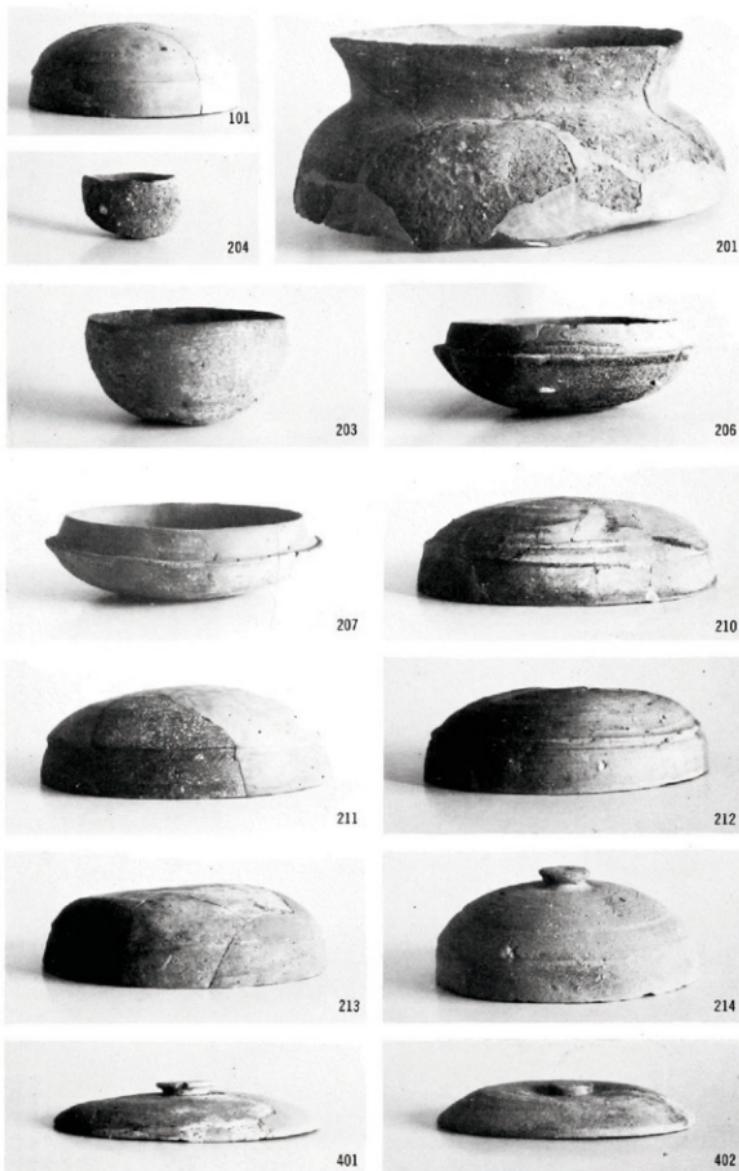


SB12 遗物出土状况



SX 24 (S→N)

PL 7



SB 1 (101) SB 2 (201 ~ 7 ~ 10 ~ 14) SB 4 (401 ~ 2)

(1:3)

PL 8



403



404



405



601



602



609



802



904



905



906



907



908

SB 4 (403~5) SB 6 (601~2 + 9) SB 8 (802) SB 9 (904~8)

(1:3)

PL 9



SB 10(1001 + 4 + 6 + 14 + 18)

SB 12(1201 ~ 5)

(1:3)

PL 10



1206



1207



1208



1



3



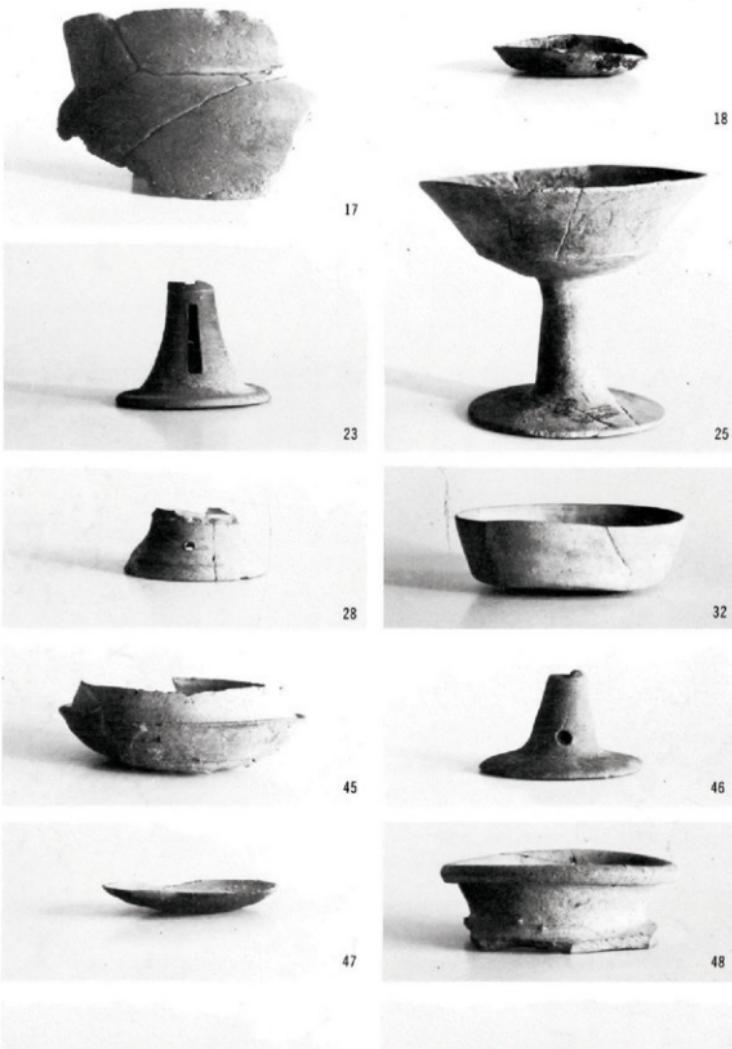
7



11

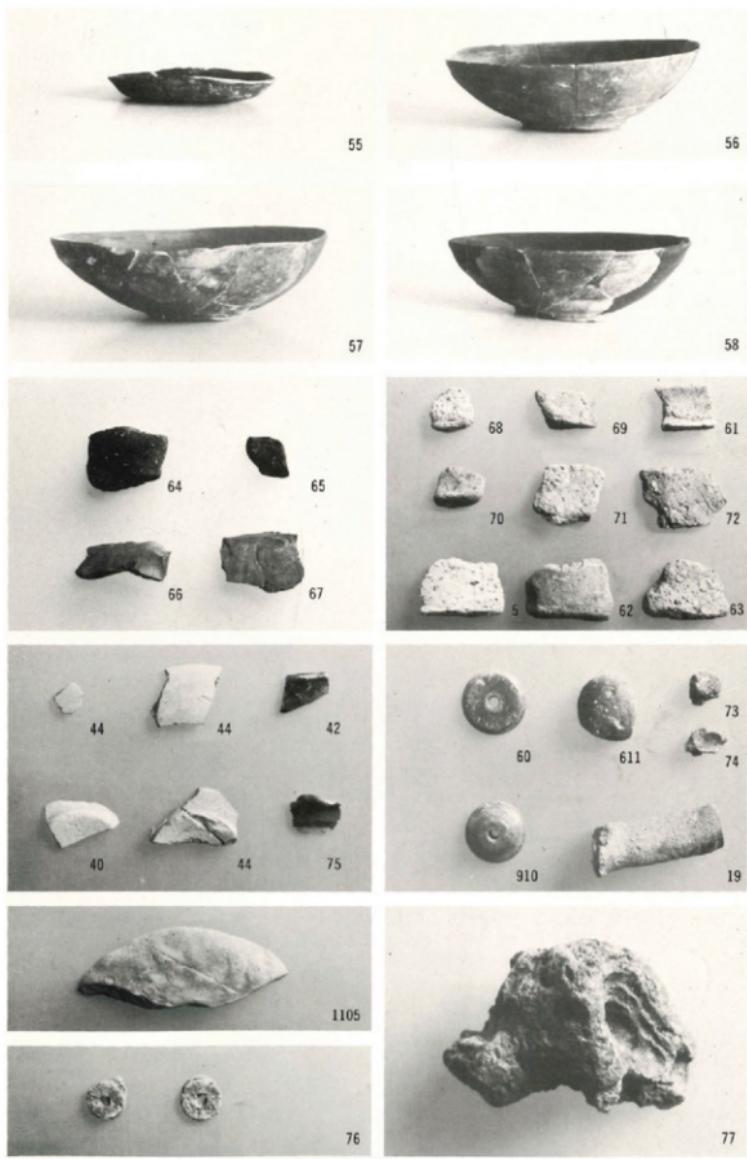
SB 12(1206~8) SD 16(1) SD 19(3) SK 26(7) SK 22(9~11)

(1:3)



SK 23(17) SK 30(18) SK 34(23) 補足調査区 A (25・28・32) 調査区主要部(45～48・53～54) (1:3)

PL 12



調査区主要部(44・55~72) SK27(5) 捕足調査区F(40・42・75) SK31(19) SK25(73~4)
SB6(611) SB9(910) SB11(1105) SK24(76) 表面採集(77) (1:3)

